（様式 2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

平成27年度～平成29年度「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究成果報告書概要

1 学校法人名　岐阜済美学院　　2 大学名　中部学院大学

3 研究組織名　中部学院大学　総合研究センター

4 プロジェクト所在地　岐阜県関市桐ヶ丘二丁目1番地

5 研究プロジェクト名　客観的評価に基づく認知症の早期発見、症状改善、地域受入支援研究

6 研究観点　地域に根差した研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
三上　章允	看護リハビリテーション学部	教授

8 プロジェクト参加研究者数　9　名

9 該当審査区分　理工・情報　　生物・医歯　　人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
三上章允	中部学院大学・教授	認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	統括・医学的視点からの連携・脳機能評価
後藤真澄	中部学院大学・教授	認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	副統括・看護師的視点からの連携・健康評価
千鳥司浩	中部学院大学・教授	認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	理学療法士的視点からの連携・神経機能評価
森田直子	中部学院大学・准教授	認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	介護福祉士的視点からの連携
有川　一	中部学院大学・准教授	認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	運動指導、運動機能の評価
（共同研究機関等）			
新井康友	佛教大学・准教授	認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	社会福祉士的視点からの連携
齋藤亜矢	京都造形芸術大学・准教授	認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	空間・図形認知評価
三輪一統	神戸大学・講師	認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	認知症ケアのマネージメント
橋　逸郎	中部学院大学短期大学部・特任准教授	認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	運動指導、運動機能の評価

（様式 2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	中部学院大学短期大学部・准教授	有川　一	運動指導、運動機能の評価

（変更の時期：平成29年4月1日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中部学院大学短期大学部・准教授	中部学院大学・准教授	有川　一	運動指導、運動機能の評価

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	中部学院大学・准教授	新井康友	社会福祉士的視点からの連携

（変更の時期：平成29年4月1日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中部学院大学・人間福祉学部・准教授	佛教大学・准教授	新井康友	社会福祉士的視点からの連携

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	中部学院大学・准教授	齋藤亜矢	空間・図形認知評価

（変更の時期：平成28年4月1日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中部学院大学・教育学部・准教授	京都造形芸術大学・准教授	齋藤亜矢	空間・図形認知評価

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究	中部学院大学・経営学部・講師	三輪一統	認知症ケアのマネージメント

（変更の時期：平成27年4月1日）

（様式 2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中部学院大学・経営学部・講師	神戸大学・講師	三輪一統	認知症ケアのマネージメント

＜研究者の変更状況（研究代表者を含む）＞

旧

ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究	中部学院大学短期大学部・非常勤講師	橋　逸郎	運動指導、運動機能の評価

（変更の時期：平成28年4月1日）

新

変更前の所属・職名	変更（就任）後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
中部学院大学短期大学部・非常勤講師	中部学院大学短期大学部・特任准教授	橋　逸郎	運動指導、運動機能の評価

11　研究の概要（※　項目全体を10枚以内で作成）

（1）研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本学がキャンパスを置く岐阜県Ａ市において、①認知症をできるだけ初期に発見し、進行を遅らせ、社会適応可能な状態の維持に務め、②認知症があっても初発から終末期まで地域で暮らせる環境整備の実現に向け、実践モデルの構築を目指した。また、脳血流等による客観的評価を試み、地域のおける認知症受入体制を実現のための基礎データを得ることを目的とした。

この目的実現のために、①A 市民の認知症に関する意識調査、②A 市内で認知症高齢者を受け入れている全施設で働くスタッフを対象とした認知症高齢者ケアについての意識調査、③地域包括センター、居宅介護支援事業者における在宅認知症高齢者支援の事例調査、④認知症対応型グループホーム、小規模多機能施設、介護保険施設における困難事例の調査を実施した。また、⑤認知症予備軍と考えられる地域高齢者の身体機能、認知機能、脳機能の測定を実施し、これらの結果から認知症早期発見、地域ケアにおける課題を考察した。

（2）研究組織

中部学院大学に在籍する関連分野の研究者によって組織する2つの研究者グループを組織し、①「認知症の評価と症状改善プログラムの開発研究」、および、②「認知症の地域受入のための多職種連携体制の研究」の2つのテーマについての研究に取り組んだ。メンバーのうち、3 名はプロジェクト開始後、他大学に移動したが、メンバーとして継続して活動した。研究代表者（三上）は、両方のテーマを統括するとともに、テーマ1（①）を中心に取り組み、副統括責任者（後藤）は、テーマ2（②）を中心に取り組んだ。しかし、これらの2つの研究テーマはお互いに関連が深く、また中心メンバーが同じ学部のスタッフであるため、研究活動は常時連携しながら取り組み、予算も共同で使用した。上記 2 名以外の研究者の役割については、「10 研究プロジェクトに参加する主な研究者」の表に記した。

さらに、研究遂行を円滑に進めるため、当初の研究組織に入っていなかった学内研究者 4 名（看護学科教員の高田真澄、人間福祉学科教員の名倉弘美、理学療法学科教員の笠野由布子および菅沼惇一）および中部大学大学院の大学院生２名（博士課程大学院生の平澤園子、修士課程大学院生の王吉彤）を研究協力者として組織した。

（様式 2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

（3）研究施設・設備等

本研究では現有の施設・設備を利用した。

（4）研究成果の概要　※下記、13及び14に対応する成果には下線及び＊を付すこと。

岐阜県 A 市において、①認知症をできるだけ初期に発見し、進行を遅らせ、社会適応可能な状態の維持に務め、②認知症があっても初発から終末期まで地域で暮らせる環境整備の実現に向け、実践モデルの構築を目指した。また、脳血流等による認知症の初期症状の客観的評価を試み、地域のおける認知症受入体制を実現するための基礎データを得た。

＜テーマ 1＞

（1－1）認知症についての市民の意識調査

まず、A 市の 3 地区において 8638 世帯を対象に認知症に関する意識調査用紙を全戸配付し、1208 名の回答を得た。その結果、数年前に行われた他地域の調査と比較して、認知症への関心の高まり、知識の普及の傾向が見られた。しかしながら、利用できるサービスについての知識や、地域包括支援センターについての理解が低いなど、今後の課題も読み取れた。男女比較では、女性が認知症の知識が高く、認知症予防、認知症に対する態度、地域へのかかわりにも積極的であった。一方、自分自身が認知症になる心配も女性の方が高かった。年齢層による比較では、高年齢層の人は自分自身が認知症になる心配が高く、認知症予防、認知症に対する態度と地域へのかかわりにも積極的であった。また、一人暮らしの人は認知症の知識が高く、認知症予防に積極的に努力していた。この結果の一部は文献 5＊で報告した。

（1－2）認知症についての高齢者ケア施設スタッフの意識調査

A 市内で認知症高齢者を受け入れている全施設（136 施設）を対象に、施設で働くスタッフに認知症高齢者ケアについての意識や態度を調査し 1013 部の回答を得た。その結果、「アルツハイマー病の症状」や「尊厳ある対応の重要性」，「心身変化が日常生活に与える影響」についは比較的よく知られているが，「前頭側頭型認知症の症状」や「認知症ケアを支える社会的資源」については知らないスタッフが多いこと，認知症ケア経験年数が長いほど，認知症についての知識・理解が高いことが明らかになった。また，施設・事業所タイプ別の比較では，特養，グループホーム，デイサービス，訪問看護で認知症の知識・理解が高かった。さらに，認知症ケアに対する積極的・肯定的なスタッフで認知症の知識・理解が良かった。これらの結果の一部は文献2＊で報告した。一方、介護福祉士資格の有無で比較すると介護福祉士資格を持つ者の方が資格を持たないスタッフと比較して知識が高かった。この結果の一部は文献 7＊で報告した。また、A 市を含む全国4557の地域包括センターから無作為に抽出した 1604 センターを対象とした全国調査の結果、「認知症初期集中支援チーム」設置の地域包括支援センターで介護サービス事業所およびインフォーマル組織との連携の度合いが高いこと、また、地域課題を検討する地域ケア会議を実施している地域包括センターで「認知症高齢者家族への支援が不足」の課題がより多く抽出されていることが示された。これらの結果の一部は、文献1＊および文献 4＊で報告した。

（1－3）地域における認知機能・運動機能・脳機能測定会の実施

A 市において認知症についての理解を深めるため、認知症や記憶機能について A 市主催の市民セミナー、および、NPO 法人（ふるさと福祉村）主催の学習会の 2 回の市民向け講演会をおこなった。また、認知症について NPO 法人（ふるさと福祉村）の情報誌に認知症や記憶機能についての記事を執筆し、市民向け啓蒙活動に協力した（文献 3、12、16、17＊）。さらに、A 市内で実施した調査の解析を終了した時点で、市民対象の意識調査の結果についての説明会を実施した。その後、A 市内の特定地区をターゲットとした、認知機能、運動機能、脳機能についての測定会を4回実施した。測定会では、知的機能測定、運動機能測定、体組成を含む身体計測に加え、研究用ポータブル光脳機能イメージング装置（LIGHTNIRS、島津製作所製、本経費で購入）による脳機能測定（以降、fNIRS と記載）、体成分分析装置（InBody570、インボディ社製、他予算で導入）による体組成測定を行った。知的機能測定には、ミニメンタル・ステート・テスト

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

(MMSE)を用いた。

まず、健康状態チェックのための、身長、体重、バイタル（血圧、SPO2、脈拍）、問診、ADL(日常生活機能テスト)を行った。ADL の評価には、文部科学省による「新体力テスト」（文部科学省、2001 年 3 月）における 12 項目の質問紙を用いた。また、InBody による体組成計測を行った。その結果を参考に、運動機能計測の経験を持つ教員（有川）が問診を行い、運動機能計測の可否を判定した。つぎに、運動機能計測として、握力、上体起こし、長座体前屈、開眼片足立ち、6 分間歩行、10m 歩行、10m 障害物歩行、を計測し、最後にfNIRS による脳機能計測を行った。各個人の計測結果は大学に持ち帰り解析し e-Stat（政府統計の総合窓口）発表による最新の標準値と比較するとともに、計測結果、評価内容を記載したシートを作成し、このシートを当該個人にフィードバックした。その際、個人毎に今後の健康管理・運動指針を示した。今回測定した 77 名は簡易認知症検査であるMMSEの測定値が 22-26 の軽度認知機能障害疑い高齢者が 19 名であったが、21 以下の高齢者は皆無であった。MMSEと運動機能、MMSEとADLとの間には統計的に有意な相関はなかった。

fNIRS による脳機能の測定は、57 名の高齢者に対して実施した。測定会の会場でできるだけ多くの高齢者で測定を行うため、1 名 30 分以内で終了する比較的簡単な課題（GO/GONO 課題）を遂行中に前頭部の局所脳血流を測定した。GO/GONO 課題では図形によるGO反応（ボタン離し）とNOGO反応（ボタン押しっぱなし）を選択してもらい、さらに、3 回正答が連続すると反応図形の意味が逆転する逆転条件や新しい図形が出現する新規条件を導入した。この課題は前頭葉の機能をテストする課題のひとつであり、前頭葉が損傷するとできなくなる課題である。今回の脳機能測定に参加した地域高齢者はこの課題の遂行には問題がなかった。課題遂行中の局所脳血流は課題遂行中の全経過の観察では、全ての被験者で課題開始からしばらくして脳血流の変化が見られた。また、課題遂行に合わせ加算平均したデータを作成し解析したところ、全被験者で課題遂行に合わせたオキシ・ヘモグロビン（酸素と結合したヘモグロビン）の変化が見られ、前頭葉の脳活動が確認された。MMSEの点数との比較では、MMSE値の低い高齢者で課題遂行に対応した脳血流の変化が小さい傾向にあったが、個人差が大きく、MMSE値が高くでも脳血流変化の小さい被験者やMMSEの点数が低くても脳血流変化の大きい被験者があり、今後、認知機能の変化と合わせ継続的な観察・研究が必要と考えられる。

MMSE による認知機能評価について、日本では、一般に、27～30 点が正常、22～26 点が軽度認知症の疑い、21 点以下 どちらかというと認知症の疑いが強いという評価基準で使用されてきた。一方、海外でのデータなどを参考に日本老年医学会では、23 点以下が認知症疑いである（感度 81％、特異度 89%）。27 点以下は軽度認知障害(MCI)が疑われる（感度 45-60%、特異度 65-90%）としている。これらの基準値はあくまで臨床的な経験や統計結果によるものである。個別の脳機能には個人差があるので、一般化は危険である。今回の調査では MMSE の値が 26 の被測定者ではfNIRS 振幅のばらつきが見られたが、25 点以下の被測定者は全員fNIRS の低振幅を示した。脳機能から見ると 25 をカット・オフとするのが良いかもしれない。しかし、今回は MMSE が 25 以下の被測定者の数が少なかったので、今後さらにデータを増やす必要がある。

また、今後は MMSE の評価点が正常範囲であったにもかかわらずfNIRS で記録したオキシ・ヘモグロビンの変動幅が小さかった高齢者についても、認知機能の変化と合わせ継続的な観察・研究が必要と考えられる。さらに、今回の測定会は地域の集会所で開催したため、比較的健康状態の良好な高齢者が集まった傾向にある。今後は高齢者ケア施設や病院での計測も考慮が必要である。

＜テーマ2＞

認知症・多死時代を迎え、高齢者が住み慣れた場で「尊厳と個別性」が尊重された生活を継続することを可能にしていかなければならない。高齢者ケアの目標は「エイジング・イン・プレイス」である。この目標の実現に際しては、ケアの調整役となる介護支援専門員、地域の保健医療福祉関係者や地域住民（民生院）を含めた多くの関係者との連携が必要となり、地域の支援システムの構築が求められている。この研究では、

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

認知症高齢者が認知症発見から最期の時まで地域で暮らし続けることを可能にするために、地域でどのような環境や支援が必要かを明らかにすることを目的とする。そのために私たちの調査班では、まず、地域で支援している人の支援困難な内容を把握することを視点に置き、今回の研究に着手した。

以下の3つの調査を実施した。

(2－1)在宅における認知症高齢者への支援事例に関する調査

介護支援専門員の専門職との連携、地域住民(民生委員)との連携の実態を把握するたえめ、A 市の居宅介護支援事業所、訪問看護事業所、訪問介護事業所、地域密着型サービス事業所等へ郵送調査を行った。また、居宅介護事業所のケアマネージャーへ認知症対応への困りごとについての記述アンケートを行った。6ヵ所の地域包括支援センター、16ヵ所の居宅介護支援事業者から78通のアンケートを回収し(回収率 :48.9%)、41事例の支援困難事例の提供を受けた。提供を受けた事例についてその特徴をまとめた結果、支援困難事例の特徴として以下の 9 点が明らかになった。

①独居で認知症の方が増加している。そのため、問題が深刻化してから発見され、より対応が困難になっている。

②独居、支援者がいない、認知症の自覚症状がない(病識がない)→介入が難しい(サービス利用に繋がらない)

③認知症の病識がないため、受診せず。そのため、主治医意見書を書いてもらえず、要介護認定も申請できない。

④独居でも家族・親族がいればよいが、家族が死亡や遠方などの場合、協力が得られず、支援困難になる。

⑤収入が低いと支援困難になる。

⑥同居家族がいても精神疾患で援助拒否。

⑦認知症の軽度者(要支援 1～要介護 2)が多い。→特別養護老人ホームへ入所できずに困っている。

⑧自動車の運転が心配。自動車を運転しないと生活できない地域に住んでいる高齢者も多い。

⑨主治医の連携に格差がある。

(2－2)認知症ケア施設における認知症困難事例と支援の課題についての実態

認知症対応型グループホームと小規模多機能施設における認知症困難事例と支援の課題を把握するために、利用者の要介護度と認知症診断名の状況、利用申し込み時の受け入れ困難判断事例の有無とその内容、利用中止、退去事例の有無とその内容、認知症専門医との連携の有無について実態調査を行った。

グループホーム 8 施設、小規模多機能 4 施設、計 12 施設(回収率 43%)から回答を得た。その結果、利用申し込み時の受け入れ困難判断事例」や「利用中止事例」が「あり」との回答は 12 施設中、5 施設であった。理由としては「暴言暴力」「徘徊帰宅行動」が挙がった。退去事例は2件のみであった。対応困難な内容は、予想外に少なかった。

(2－3)介護保険施設における看取りケアの支援困難な内容と課題の調査

介護保険施設における認知症高齢者への看取りケアの支援困難な内容と課題を明らかにするために、A 市の介護保険施設の看取りのケアの実施状況について調査を行い、看取りケア実施にあたり、支援困難な内容を把握した。また、事業主の管理者の承諾を得て、調査依頼と調査内容及び方法の説明を行い、事例調査の承諾を得る。在宅での看取りを可能にしたケースの事例分析を行った。

介護保険施設 25 施設にアンケート配付し、5 施設(回収率 20%)から回答を得た。回答が得られた施設においては医療機関併設の老人保健施設がほとんどであった。看取りを行えている 5 施設においては、終末期に認知症の人がどのような医療やケアを望むのか、リビングウイルに関しての対応がなされていなかった。また認知症専門医との連携が図れている施設は、半数に至っていない。認知症は、死に至るまでの過程が長く、多様であり、終末期であるという判断も難しいこと、また、終末期に受けたいケアに関する本人の

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

意思確認が難しく、家族にも困難な場合が多いなどの課題が示された。

Ａ市では、認知症ケアパスを認知症の進行に合わせて支援が受けられるように、一覧にした「認知症の症状とケアの流れ」の図を作成した。認知症が発見され、支援にアクセスできると、その支援の流れに乗って適切なケアが行われることが図式化されている。この点で市としての取り組みが進んでいるものの、認知症の発見に至るまでの過程においては、認知症の診断や支援への介入における対応者のさまざまな困難があることも示された。また、認知症の人が終末期を迎えたときに、意思決定が困難であることが多く、どのような医療やケアが受けたいかを意思表明できるリビングウイル等の手続き等の課題があった。認知症に特化した課題や対応まで踏み込んだ研究は、未だ少ない。さらに認知症ケアの質の向上に向けた発見から看取りまでの認知症ケアの基準作成や評価、ケアの効果への研究が今後期待される。

＜優れた成果が上がった点＞

地域住民の調査では、認知症についての理解が進んでいる現状が確認できたが、地域包括センターを含む社会サービス資源についての周知が十分でない実態と、世帯によるばらつきが明らかになった。今後これらの要因を考慮した認知症予防・ケア対策の必要性が示された。

高齢者施設の調査では、「アルツハイマー病の症状」や「尊厳ある対応の重要性」，「心身変化が日常生活に与える影響」についは比較的よく知られているが，「前頭側頭型認知症の症状」や「認知症ケアを支える社会的資源」については知らないスタッフが多いこと，認知症ケア経験年数が長いほど，あるいは、看護福祉士資格を有する方が、認知症についての知識・理解が高いことが明らかになった。さらに，認知症ケアに対する積極的・肯定的なスタッフで認知症の知識・理解が良かった。これらの結果は、今後の高齢者ケア・スタッフ養成に有益な情報となった。特に、地域包括センターを含む認知症ケアの社会的資源については、システムが複雑なことも相まって、地域住民にあまり知られておらず、さらに、高齢者ケア・スタッフにも良く知られていないことが明らかになり、今後は社会的資源について周知する取り組みの必要性が示された。

認知症高齢者をケアする施設における看取りについての調査では、終末期に認知症の人がどのような医療やケアを望むのか、リビングウイルに関しての対応がなされていないことが明らかになった。また認知症専門医との連携が図れている施設は、半数に至っていなかった。認知症は、死に至るまでの過程が長く、多様であり、終末期であるという判断も難しいこと、また、終末期に受けたいケアに関する本人の意思確認が難しく、家族にも困難な場合が多いなどの課題が示された。

Ａ市市長およびＡ市福祉課の協力を得ながら、市民調査と高齢者施設調査を実施し、また、住民計測会では地元老人会との連携が実現した。市民の意識調査では、認知症高齢者での地域受入に向けて、認知症ケアの社会資源の理解を進める必要があること、また、そのためにも地域包括センターの活用が必要であることが明らかになった。また、Ａ 市および地元自治会・老人会との連携体制が構築できたことにより、今後の地域連携の道筋を開拓できた。

＜課題となった点＞

3 年間という短い期間で実施したプロジェクトであり、前半は住民調査や施設の調査が中心となったため、住民を対象とした健康調査、運動機能、脳機能の計測は実質１年半程度しかできず、認知症が発症する経過を追うのは難しかった。今後、長期にわたる研究の継続が必要である。また、当初は予防のための教室の開催を考えていたが、市民アンケートでは運動機能への関心が最も高かったので、プロジェクト実施中は、運動機能の測定の結果をフィードバックすることによる運動指導に切り替えた。予防教室の開催は今後の課題である。また、今回の研究過程において地域で実施した測定会には比較的元気な高齢者が集まる傾向にあることが判明したので、今後はステージの進んだ認知症高齢者も対象にできるよう高齢者施設や病院で計測機会を実施することも課題となった。

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

＜研究期間終了後の展望＞
認知症はゆっくりと進行するので、長期に渡って継続する研究が必要である。そのため A 市の協力を得て、地域住民の調査等を今後も継続する予定である。

＜研究成果の副次的効果＞
本研究で導入したfNIRS は、様々な研究での活用が可能であり、すでに、瞑想中の脳機能解析や動画環境下におけるバランス維持時の脳機能解析などにも活用しており、今後、様々な研究領域への活用が期待できる。

12 キーワード（当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。）

（1）認知症　（2）高齢者　（3）地域
（4）介護施設　（5）運動機能　（6）脳機能
（7）多職種連携　（8）在宅

13 研究発表の状況（研究論文等公表状況。印刷中も含む。）

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには＊を付すこと。

＜雑誌論文＞

＜テーマ 1＞

1＊. 平澤園子、王吉彤、樋田小百合、三上章允、地域包括支援センターにおける地域ケア会議実施に関する調査報告. 厚生の指標、17 （印刷中）

2＊. 王吉彤, 名倉弘美, 三上章允、高齢者施設スタッフの認知症についての知識・理解と態度. 厚生の指標、64、45-52、2017

3＊. 三上章允、記憶について考えるⅢ、各務原市ふるさと福祉村情報誌、2017 春号、8-9、2017

4＊. 平澤園子、王吉彤、樋田小百合、三上章允、地域包括支援センターにおける認知症初期集中支援チーム設置の効果. 日本認知症ケア学会誌、16、670-679、2017

5＊. 王吉彤、名倉弘美、三上章允、認知症に対する地域住民の知識・理解の現状と課題. 中部学院大学・中学院大学短期大学部・研究紀要、18、21-30、2017

6. 酒井千知、野中浩幸、清水　純、伊藤栄見子、三上章允、精神科救急病棟における服薬支援の現状と課題－病棟スタッフへのアンケート調査を中心に－、中部学院大学・中学院大学短期大学部・研究紀要、18、31-40、2017

7＊. 王吉彤、名倉弘美、三上章允、介護資格の取得者と無資格者による認知症ケアの比較. 人間福祉学会誌、16、1-9、2017

8. 平澤園子、王吉彤、樋田小百合、三上章允、地域包括センターにおける認知症早期発見・支援に関する現状と課題－都市部と農村部の比較－. 人間福祉学会誌、16、19-26、2017

9. Sakai T, Mikami A, Suzuki J, Miyabe-Nishiwaki T, Matsui M, Tomonaga M, Hamada Y, Matsuzawa T, Okano H, Oishi K, Developmental trajectory of the corpus callosum from infancy to the juvenile stage: comparative MRI between chimpanzees and humans. PLOS ONE, 1-22, June 27, 2017.

10. Handa T, Unno S and Mikami A. Temporal property of single-cell activity in response to motion-defined shapes in monkey dorsal and ventral cortical areas. NeuroReport 28, 793-799, 2017

11. Sakai T, Komaki Y, Hata J, Okahara J, Okahara N, Inoue T, Mikami A, Matsui M, Oishi K, Sasaki E, Okano H, Elucidation of developmental patterns of marmoset corpus callosum through a comparative MRI in marmosets, chimpanzees, and humans. Neuroscience Research, 122, 25-34, 2017

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

12＊. 三上章允、記憶について考えるⅡ、各務原市ふるさと福祉村情報誌、2016 夏号、8-9、2016

13. Tsuji Y, Prayitno B, Norwana O, Nishi E, Widayati KA, Mikami A, Suryobroto B,. The Notes on Mammal Carcasses Collected in Pangandaran Nature Reserve, West Java, Indonesia. HAYATI, 23, 35-38, 2016

14. 笠野由布子、三川浩太郎、久保田大夢、瀧瀬陵子、小池拓、中村一輝、三上章允、大学生における履物および運動習慣が足部形態に与える影響、中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要　17, 1-10, 2016

15. 野中浩幸、清水　純、酒井千知、伊藤栄見子、吉川武彦、三上章允、精神科救急病棟における服薬支援の現状と課題　－　病棟看護管理者へのアンケート調査から　－、厚生の指標　63, 23-28, 2016

16＊. 三上章允、記憶について考えるⅠ、各務原市ふるさと福祉村情報誌、2015 冬号、1-2、2015

17＊. 三上章允、脳からみた認知症、各務原市ふるさと福祉村情報誌、2015 夏号、4-5、2015

18. Fujita Y, Yamada M, Kinameri T, Yamamoto Y, Hashimoto K, Makio S, Tanno K, Mikami A, Head rotation destabilize balance of standing posture, fysioterapeuten, 82, 40, 2015

19. Mikami A, Goto M, Kobayashi A, Tsukamoto T, Bao M, Sakai M, HSU Katagiri F, Morita N, The Terminal Care of Elderly People in East Asia. IAAPS Proceedings, 5, 38-50, 2015

20. 小林明子、塚本利幸、酒井美和、後藤真澄、三上章允、森田直子、片桐史恵、包敏、徐明仿、台湾の高齢者の終末期ケアに関する看取り観・死生観、福井県立大学論集、44、55-86、2015

21. 三上章允、劉　青佳、中部学院大学学生の生活習慣の実態　－2013 年度調査報告－、総合研究センター研究報告 2015、1-13、2015

22. 平井達也、千鳥司浩、高齢者と若年者のグレーディングの相違、体育の科学、67、826-830、2017

23. Chidaori K, Yamamoto Y.　Effects of the lateral amplitude and regularity of upper body fluctuation on step time variability evaluated using return map analysis. PLOS ONE, 1-13, June 10, 2017.

24. Chidori K, Takeda K., Yamamoto Y. Effects of Aging on the Relationship between Standing Balance and Sensation in the Plantar Area. Jacobs Journal of Gerontology. 1-4,　08-13-2016, 2017

25. 千鳥司浩・山本裕二：高齢者の歩行周期時間変動に影響を及ぼす要因の検討. 理学療法科学, 31(2):213-219. 2016

26. 古田善伯、有川一、鈴木康介、体つくり運動の教材解釈について－体力トレーニング理論の視点から、中部学院大学・中学院大学短期大学部・教育実践研究、3、197-204、2017

27. 有川　一：保護者に「遊び方」を提供することの効果. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究. 2, 115-120, 2017.

28. Terada T, Takahashi T, Arikawa H, Era S : Analysis of the conformation and thermal stability of the high affinity IgE Fc receptor　β　chain polymorphic proteins. Biosci Biotech Bioch. 80(7), 1356-1361, 2016.

29. Takahashi T, Terada T, Arikawa H, Kizaki K, Terawaki H, Imai H, Itoh Y, Era S : Quantitation of Oxidative Modifications of Commercial Human Albumin for Clinical Use: Thiol Oxidation and Carbonylation. Biol Pharm Bull. 39(3), 401-408, 2016.

30. Maeda K, Yoshizaki S, Iida T, Terada T, Era S, Sakashita K, Arikawa H : Improvement of the fraction of human mercaptalbumin on hemodialysis treatment using hydrogen-dissolved hemodialysis fluid: a prospective observational study. Renal Replacement Therapy. 2(42), 2016.

31. Arikawa H, Terada T, Takahashi T, Kizaki K, Imai H, Era S : Continuous vocalization during kendo exercises suppresses expiration of CO_2. International Journal of Sports Medicine, 36(7), 519-525, 2015.

32. Kizaki K, Terada T, Arikawa H, Tajima T, Imai H, Takahashi T, Era S : Effect of reduced coenzyme Q10 (ubiquinol) supplementation on blood pressure and muscle damage during kendo training camp: a double-blind, randomized controlled study. The Journal of Sports Medicine and Physical Fitness. 55, 797-804, 2015.

（様式 2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

33. 有川　一, 吉田真己子 ：「各務原市こども基地プロジェクト」における学生による地域活動の成果. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 16, 113-118, 2015.
34. 楊進、橋逸郎、太極拳推手詳解.　ベースボール・マガジン社 2017
35. 雨宮隆太、橋逸郎、完全版呼吸法.　ベースボール・マガジン社 2016
36. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第９回　弥生人と絵文字,『図書』(岩波書店), 830,46-49、2018
37. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第８回　「美しい」と「怖い」,『図書』(岩波書店), 829, 44-47.、2018
38. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第７回　自然の美、人工の美,『図書』(岩波書店), 828, 44-47.、2018
39. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第６回　からだとこころ,『図書』(岩波書店), 827, 46-49. 2017
40. 齋藤亜矢)ルビンのツボ　第５回　自由と不自由,『図書』(岩波書店), 826, 46-49. 2017
41. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第４回　考える、考えない,『図書』(岩波書店), 825, 46-49. 2017
42. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第３回　手の想像、目の想像,『図書』(岩波書店), 824, 42-45. 2017
43. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第２回　洞窟壁画とアール・ブリュット,『図書』(岩波書店), 823, 42-45. 2017
44. 齋藤亜矢、ルビンのツボ　第１回　サイエンスの視点、アートの視点,『図書』(岩波書店), 822, 38-41. 2017
45. 齋藤亜矢、自然と芸術　第１回　円山応挙のフィールドノート,『モンキー』(公益財団法人日本モンキーセンター), 1(4), 78-79、2017
46. 齋藤亜矢、「言葉を得ることで失ったもの」)In　内藤知美・新井美保子編「コンパス保育内容言葉」, 建帛社(分担執筆)pp. 83-84、2017
47. 齋藤亜矢、「ヒトはなぜ表現するのか？」In　池永真義編「シリーズ新時代の学びを創る７　図画工作・美術理論と実践」, あいり出版.（分担執筆） pp1-6、2016

＜テーマ2＞

1. 後藤真澄　日本 EPA(経済連携協定)の看護師・介護福祉士候補者の教育・研修の課題に関する文献研究、中部学院大学・中学院大学短期大学部・教育実践研究 3 (2)、(印刷中)
2. 後藤真澄　認知症高齢者の終末期ケアの場における課題に関する文献検討. 日本認知症ケア学会誌　17、761-768、2018
3. 後藤真澄　EPA(Economic Partnership Agreement)送り手国の看護師と受け入国である彼らの指導者の看取り観の比較研究　厚生の指標　65(2)1-9, 2018
4. 後藤真澄、清水律子、杉山篤子、服部恵子、在宅看護学実習に対する学生の学びと指導への検討、中部学院大学・中学院大学短期大学部・教育実践研究 3 (1)、223-232, 2017
5. 杉山篤子、後藤真澄　独居の認知症高齢者における訪問看護サービスの現状と課題. 人間福祉学会誌 16、37-42、2017
6. 後藤真澄　災害時の介護福祉教育の検討、中部学院大学・中学院大学短期大学部・教育実践研究 3 (2)、167-173, 2017
7. 後藤真澄　老年看護、在宅看護教育への ICF(国際生活機能分類)モデルへの適応 ICF の枠組みに基づく看護過程と看護診断の構造的比較、人間福祉学会誌、15, 87-95、2015
8. Goto M, Morita N, Katagiri F, Tsukamoto T, Current Conditions and Worker Attitudes in End-of-Life Care for the Elderly in Korea, Nursing and Health, 3, 14-21, 2015
9. 三原博光、國定美香、新井康友、松本百合美、原田由美子、島野麻里子、大内隆「介護福祉士養成校の学生達の介護意識について－質問紙調査を通して－」『人間と科学　県立広島大学保健福祉学部誌』。
10. 新井康友「買い物難民の現状とニーズに関する一考察―住民による買い物支援活動を通して－」『地域サイエンス』2、pp47-53、2015
11. 新井康友「特別養護老人ホームへの入所条件の厳格化による影響－A 県 B 市にある C 施設の入所待機者を参考にして－」『ソーシャルワークぎふ』22 号、pp75-79、2017

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

12. 新井康友「社会的な災害のひとつとしての『熱中症』 熱中症の背景にある貧困と社会的孤立」『福祉のひろば』2017 年 7 月号、pp38-41、2017
13. 新井康友「高齢者の緊急対応事例への支援体制に関する一考察」『地域ケアリング』19(8)、pp54-56、2017
14. 新井康友「孤立死事例を通して社会的孤立の予防について考える」『地域ケアリング』19(3)、pp61-63、2017
15. 新井康友「東海地区における高齢者の孤立死事例に関する一考察」『地域ケアリング』18(4)、pp70-76、2016
16. 新井康友「孤独死の現状と問題の本質について」『地域ケアリング』17(5)、pp6-12、2015 年。
17. 新井康友「介護事故の現状と課題－岐阜県 A 市の介護事故報告書を中心に－」『人間福祉学会誌』15(2)、pp49-53、2016
18. 浅田訓永・藪下武司・三輪一統 (2018)「有給インターンシップ制度の一断面―新潟大学, 京都産業大学大学及び中部大学における有給インターンシップ制度の比較研究―」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』印刷中.
19. Miwa, K., Y. Murakami, A. Shiiba, and S. Taguchi. 2018. Contract Rigidity and Timeliness of Accounting Information. RIEB Discussion Paper Series DP2018-09, Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University.
20. Miwa, K., S. Taguchi, and T. Yamamoto. 2017. Are IPOs "Overpriced?" Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter. RIEB Discussion Paper Series DP2017-07, Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University.
21. 三輪一統・椎葉淳 (2017)「新規参入企業に対するプレアナウンスメントの戦略的効果」『現代ディスクロージャー研究』第 16 号, pp.1-23.
22. 浅田訓永・藪下武司・三輪一統 (2017)「中部学院大学経営学部のインターンシップの現状分析」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』第 2 巻, pp.175-184.
23. Miwa, K. 2016. Welfare Effects of Endogenous Information Acquisition and Disclosure in Duopoly Markets. RIEB Discussion Paper Series DP2016-17, Research Institute for Economics and Business Administration, Kobe University.
24. 田口聡志・上枝正幸・三輪一統(2016)「契約支援機能における会計の質に関する理論と実験の融合に向けて」『同志社商学』第 67 巻第 4 号, pp.469-495.

＜学会発表＞

＜テーマ 1＞

Mikami, A. Goto, M., Hiruma, Y, Morita, N, Kasano, Y, Yamashita, S. et. al., The Terminal Care of Elderly People in South East Asia, Proceedings of 15th Asia Pacific Conference, 2017

＊平澤園子、王吉彤、樋田小百合、三上章允、地域包括支援センターにおける認知症初期集中支援チーム設置の効果. 人間福祉学会、2017

＊名倉弘美、王吉彤、三上章允、高齢者施設スタッフのパーソン・センタード・ケアの知識と実践の現状、第 17 回人間福祉学会、2016

＊王吉彤、名倉弘美、三上章允、認知症に対する地域住民の知識・理解の現状と課題、第 17 回人間福祉学会、2016

Nejime H, Inoue M, Saruwatari M, Mikami A MiyachiInfluence of conflict between two behavioral rules on the activity of monkey medial and dorsolateral prefrontal neurons、The 40th Annual Meeting of the Japan Neuroscience Society、2017

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

Saruwatari M, Inoue M, Mikami A, Influence of motivation on neuronal activities of V4 in a visual search task, The 94th Anual Meeting of the Physiological Society of Japan, 2017

Mikami A, Imai, H, Widayati K, Hayakawa T, Nishi E, Nila S, Hadi I, Tsuji Y and Suryobroto B, Simulation of the color vision of dichromatic Macaques in Pangandaran, Indonesia, 5th Asian Primate Symposium 2016

Fujita Y, Yamada M, Yamamoto Y, Furusawa M, Mishima A, Makio S, Hashimoto K, Mikami A, The postural sway is not larger for larger amplitude of head rotation in healthy subjects, The Asian Confederation of Physical Therapy 2016

Yamada M, Fujita Y, Yamamoto Y, Mishima A, Furusawaa M, Makio S, Hashimoto K, Mikami A, Use of corset is effective to reduce trunk movement, but not for postural sway, The Asian Confederation of Physical Therapy, 2016

鯉田孝和、Widayati Kanthi Arum, 田中孝治、三上章允,、2 色覚サルの優れた黄青色弁別能力、日本視覚学会大会、2016

三上章允, 今井啓雄, 辻大和, 西栄美子, 早川卓志, Kanthi Arum Widayati, Bambang Surobroto、インドネシア・パンガンダランのカニクイザルの色環境、日本霊長類学会、2016

笠野由布子、三上章允、開帳足は膝関節および股関節の負荷を増大させる、第 51 回日本理学療法学術大会、2016

笠野由布子　三上章允、若年者におけるヒール靴を履くことの経験と足部形態との関連、第 26 回岐阜県理学療法学会、2016

富田元、野中浩幸、清水純、酒井千知、伊藤栄見子、三上章允、精神科救急病棟の看護管理者が考える服薬支援のあり方、第 23 回日本精神科救急学会学術総会、2015

Nejime M, Inoue M, Saruwatari M, Mikami A, Miyachi S, Conflict between different task rules influences the prefrontal neuronal activities during behavioral choice., Society for Neuroscience Anual meeting 2015

Sakai T, Komaki Y, Hata J,, Mikami A, Matsui M, Okahara J, Okahara N, , Inoue T, Sasaki E, Okano H, Developmental patterns of the corpus callosum in common marmosets, chimpanzees, and humans., Neuro 2015

Widayati K, Tanaka K, Saito A, Mikami A, Suryobroto B, Koida K, The story of color blind macaques, The 4th International Symposium on Primatology and Wildlife Science, 2015

酒井朋子, 三上章允, 小牧裕司, 畑純一, 松井三枝, 岡原純子, 岡原則夫, 井上貴司, 佐々木えりか, 濱田穣, 鈴木樹理, 宮部貴子, 松沢哲郎, 岡野栄之、ヒト、チンパンジー、コモンマーモセットにおける脳梁発達の比較研究：ヒト特異的な脳構造の発達機構の解明に向けて、日本霊長類学会、2015

Widayati K, Suryobroto B, Saito A, Mikami A, Ability of female color blind gene carrier monkeys in breaking color camouflage and discriminating colors, The 23rd Synmposium of the International Color Vision Society, 2015

笠野由布子、三上章允、若年健常女性の外反母趾角と歩行時関節モーメントの関係について、第 50 回日本理学療法学術大会、2015

Kasano Y, Mikami A, EFFECTS OF HALLUX VALGUS ANGLE ON THE MOMENTS OF LOWER EXTREMITY JOINTS DURING GAIT IN YOUNG ADULT FEMALE, World Confederation for Physical Therapy, 2015

＊Iwaki T, Komatsu T, Ohnishi T, Mikami A, THE EFFECTS OF HIGHER BRAIN FUNCTIONS ON THE RISK OF FALLS IN COMMUNITY DWELLING ELDERLY PEOPLE. World Confederation for Physical Therapy, 2015,

Fujita, Y, Yamada M, Kinameri T, Yamamoto Y, Hashimooto K, Makio S, Tanno K, Mikami A, HEAD ROTATION DESTABILIZE BALANCE OF STANDING POSTURE, World Confederation for Physical

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

Therapy, 2015

菅沼惇一、**千鳥司浩**、腰椎椎間板ヘルニア術後の下垂足に対し重量弁別課題を用いた介入効果、第 28 回岐阜県理学療法学会、2018

牧村祐希，菅沼惇一，田口周司，林節也、菅沼惇一、**千鳥司浩**、情報の不整合により大腿骨頸部骨折術後に疼痛が持続した症例に対する認知課題の効果、第 18 回認知神経リハビリテーション学会学術集会、2017

日比一晴，早瀬弘記，井上禎章，**千鳥司浩**、トレーニング期間の長さが地域在住高齢者の運動機能に及ぼす影響、第 26 回愛知県理学療法学術大会、2017

竹田圭佑，**千鳥司浩**，長谷川隆史、外傷性頸部症候群を呈した慢性頸部痛者における頸部運動の誤認角度、第 28 回長崎県理学療法学術大会、2017

林節也，田口周司，宮田春奈，竹中孝博、**千鳥司浩**、「いぼ」が消失したことで歩行が改善された一症例、第 17 回認知神経リハビリテーション学会学術集会、2016

田口周司，林節也，**千鳥司浩**、足底の身体図式が変質し，前足部荷重が困難となった一症例~トイレ動作の獲得を目指して~、第 17 回認知神経リハビリテーション学会学術集会、2016

西嶋力，井村保，大嶽昇弘，笠野由布子、**千鳥司浩**，林典雄，濱岸利夫、障害の理解を深めるための VTR 視聴とゼミ演習活動による成果 -2 年次基礎理学療法演習Ⅱの活動報告-、第 26 回岐阜県理学療法学会、2016

舟木浩平，二村誠，木佐貫昌哉，**千鳥司浩**、転倒予防ビデオを用いた転倒防止対策の取り組み ～第 2 報～、回復期リハビリテーション病棟協会 第 27 回研究大会、2016

田口周司，林節也，酒向恵，**千鳥司浩**、全失語患者の内言語による思考 ~身体・運動イメージの再構築により上肢機能の改善が図られた一症例~、第 16 回日本認知神経リハビリテーション学会学術集会、2015

渡邉僚，舟木浩平，二村誠，木佐貫昌哉，谷口香，**千鳥司浩**、転倒予防ビデオを用いた転倒防止対策の試み、第 25 回 回復期リハビリテーション病棟協会 研究大会、2015

Arikawa,H.、Vocalization during the upper and lower body exercise changes the ventilation and the peripheral circulation states（The 95th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan、2018

有川一、発声を伴う上肢と下肢の連続的運動が換気状態に及ぼす影響、第 74 回日本体力医学会大会、2017

有川一、間欠的運動実施中に行う発声は換気状態・脳血流量を変化させる、第 65 回日本教育医学会大会、2017

高橋哲平，寺田知新，**有川一**，惠良聖一 ： 輸液用アルブミン製剤のチオール酸化とカルボニル化の解析（第 62 回中部日本生理学会. 2015/11/13）

有川一，寺田知新，高橋哲平，今井一，惠良聖一 ： 剣道かかり稽古実施中の継続的な発声は呼気二酸化炭素排出を抑制する（第 70 回日本体力医学会大会. 2015/9/19）（体力医学, 64(6), 573, 2015）

Arikawa H., Tomoyoshi Terada, Teppei Takahashi, Hajime Imai, Seiichi Era : Sustained vocalizations during kendo exercises suppress expiration of carbon dioxide (8th FAOPS Congress. 2015/11/23)(Federation of The Asian and Oceanian Physiolosical Societies)

有川一，鈴木恒一 ： 日本とフィリピンの幼児の身体活動量・運動能力・体格の比較（第 16 回人間福祉学会. 2015/10/25）

Terada Tomoyoshi, Takahashi Teppei, **Arikawa H.**, Era Seiichi : Human cell lines of leukocytic, erythrocytic and megakaryocytic lineages affect redox state of human serum albumin (The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2016/3/23)

Takahashi Teppei, Terada Tomoyoshi, **Arikawa H.**, Era Seiichi : Comparative study on the oxidative modification of recombinant and plasma-derived human serum albumin: thiol oxidation and carbonylation (The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2016/3/23)

Arikawa H., Terada T, Takahashi T, Imai H, Era S : Effects of vocalization to physical activities and circulatory states during kendo exercises (The 93rd Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2016/3/24) (The Journal of Physipological Sciences, 66(Supplement 1), S186, 2016)

有川一，田下智栄子，中村浩二，三川浩太郎，今井 一:間欠運動実施中の発声が換気状態および脳血流量に及ぼす影響（第 71 回日本体力医学会大会. 2016/9/23）（**Arikawa H.**, Tashita C, Nakamura K, Mikawa K, Imai H. Effects of vocalization during intermittent exercise on ventilation and CBF. The Journal of

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

Physical Fitness and Sports Medicine, 5(6), 444, 2016)

有川一, 田下智栄子, 中村浩二, 三川浩太郎, 今井　一:発声を伴う中強度間欠運動が身体に及ぼす影響の検討(第 17 回人間福祉学会 2016. 2016/11/20)

Arikawa H., Tashita C, Nakamura K, Mikawa K, Imai H : Effects of sustained vocalization during exercise on respiratory state and cerebral blood flow.　(The 94th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2017/3/28) (The Journal of Physipological Sciences, 67(Supplement 1), S110, 2017)

有川一, 田下智栄子, 中村浩二, 三川浩太郎, 今井　一:間欠的運動実施中に行う発声は換気状態・脳血流量を変化させる. (第 65 回日本教育医学会大会)(2017.08.23)(教育医学. 63(1), 127, 2017)

有川一, 松岡敏男:発声を伴う上肢と下肢の連続的運動が換気状態に及ぼす影響. (第 72 回日本体力医学会大会) (2017.09.17)(Hajime Arikawa, Toshio Matsuoka. Effects of continuous upper and lower body exercise with vocalization on ventilation state. The Journal of Physical Fitness and Sports Medicine, 6(6), 506, 2017)

Arikawa H., Matsuoka T : Vocalization during the upper and lower body exercise changes the ventilation and the peripheral circulation states. (The 95th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2018/3/29) (The Journal of Physipological Sciences, 68(Supplement 1), S146, 2018)

Terada T, Takahashi T, Arikawa H., Muto Y, Era S : Analysis of redox state of albumin and carbonyl stress in human leukocyte cell lines.　(The 95th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan) (2018/3/30) (The Journal of Physipological Sciences, 68(Supplement 1), S184, 2018)

齋藤亜矢. "おえかき"から探る心の起源(ラウンドテーブル), 日本赤ちゃん学会第 15 回学術集会, 香川, 2015

齋藤亜矢. チンパンジーはどのように物遊びを発明するのか, 第 31 回日本霊長類学会, 鹿児島, 2015 年 7 月

Saito, A., Hayashi, M., Matsuzawa, T., & Takeshita, H. Evolution and development of representational drawing., The 31st International Congress of Psychology, Yokohama Japan, July, 2016.

齋藤亜矢, つくる喜び　見る楽しさ　―アートで育てる力―, 第 68 回全国造形教育研究大会、第 66 回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会, 2015

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのか, 人間発達講座、人間発達研究所, 2016

齋藤亜矢, 人はなぜ絵を描くのか, 岐阜県芸術文化会議, 2016

齋藤亜矢, サイエンスの視点、アートの視点, 西京高校 EEP 特別講演会, 2016

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのか, あいちサイエンスフェスティバル蒲郡, 蒲郡市生命の海科学館, 2016.

齋藤亜矢, 絵を描くこころの起源, 世田谷美術館開館 30 周年記念　コレクションの 5 つの物語」展, オープニングレクチャー, 世田谷美術館, 2016.

齋藤亜矢, 絵を描く心の進化と発達, 京都保育問題研究会分科会, 2016.

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのか, ポケットミーティング　in　東京―子どもの未来を造形から考える, 公益財団法人美育文化協会, 2016.

齋藤亜矢, チンパンジーに学ぶ造形表現のコツ―絵を描く心の進化と発達, 東洋英和女学院大学保育子ども研究所, 第 10 回保育子どもセミナー, 2017.

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのか―チンパンジー研究から洞窟壁画まで, 千曲市さらしなの里歴史資料館, 2017 日.

齋藤亜矢, 芸術の進化的起源:人間はなぜ絵を描くのか, にいがた市民大学, 2017 年 7 月 8 日.

齋藤亜矢, 絵を描く心の進化と発達, 京都造形芸術大学こども芸術大学瓜生山セミナー, 2017.

齋藤亜矢, 想像する心の起源―ヒトはなぜ絵を描くのか, 京都国際福祉センター治療教育講座 2017.

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのかー芸術認知科学への招待, 第 54 回全国幼年美術の会　夏季大学、2017

齋藤亜矢, ヒトはなぜ絵を描くのか, 中京保育研究会, 京都市中京区総合庁舎 2017

齋藤亜矢, 絵を描く心の起源を探る:チンパンジー、子ども、クロマニョン人、そして青谷びと, 青谷かみじち遺跡土曜講座, 鳥取県埋蔵文化財研究センター, 2017

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

齋藤亜矢, 絵を描く心の起源を探る, 第 12 回人工知能美学芸術研究会, 2017
齋藤亜矢, 絵を描くこころの起源, 第 38 回京都保育問題研究会講座, 2018

＜テーマ2＞
後藤真澄　EPA 送り手国と受入国の看取りケアの比較研究、日本看護科学学会、2017
＊後藤真澄　認知症高齢者のケアの場における終末期ケアの特性と課題に関する文献検討（日本在宅ケア学会）、2016
森田直子、片桐史恵、徐明彷　介護学生の死生観と関連要因の検討　人間福祉学会　2015
Miwa, K. Contract Rigidity and Timeliness of Accounting Information, (with Y. Murakami, A. Shiiba, and S. Taguchi) 日本ディスクロージャー研究学会第 3 回 JARDIS Workshop, 慶應義塾大学, 2018.
三輪一統、「強制的な情報開示と情報獲得行動: 複占市場実験による検証」第 21 回実験社会科学カンファレンス, 関西大学, 2017.
三輪一統、「強制的な情報開示と情報獲得行動: 複占市場実験による検証」日本ディスクロージャー研究学会第 2 回 JARDIS Workshop, 北九州市立大学, 2017.
Miwa, K. Are IPOs 'Overpriced'? Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter, (with S. Taguchi and T. Yamamoto) 2016 Vietnam Symposium in Banking and Finance, Vietnam National University, Hanoi, Vietnam, November 18, 2016.
Miwa, K. Are IPOs 'Overpriced'? Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying, (with S. Taguchi and T. Yamamoto) 28th Asian-Pacific Conference on International Accounting Issues, Maui, USA, November 7, 2016.
Miwa, K. Are IPOs 'Overpriced'? Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying, (with S. Taguchi and T. Yamamoto) 6th International Conference on Business and Economics Research, Vancouver, Canada, September 23, 2016.
三輪一統、「減損会計と透明性: 経営者と監査人における意見対立の開示効果の実験研究」（田口聡志・藤山敬史と共同報告）日本会計研究学会第 75 回大会, 静岡コンベンションアーツセンター（グランシップ）, 2016.
Miwa, K. Are IPOs 'Overpriced'? Strategic Interactions between the Entrepreneur and the Underwriter by Lying, (with S. Taguchi and T. Yamamoto) Tokyo Accounting Workshop, 東京大学, 2016 日.
Miwa, K. Strategic Commitment and Lying: An Experimental Study on the Interaction between Entrepreneur and Underwriter, (with S. Taguchi and T. Yamamoto) The 6th International Conference of The Japanese Accounting Review, Kobe University, Japan, December 19, 2015.
三輪一統、Why do people tell lies? 行動経済学会第 9 回大会, 近畿大学, 2015.

＜研究成果の公開状況＞（上記以外）

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等
＜既に実施しているもの＞
中部学院大学・中部学院大学短期大学部の公式ホームページの「中部学院について」の「文部科学省採択事業」の中で公開している。
URL は、https://www.chubu-gu.ac.jp/about/adopt/index.html

＜これから実施する予定のもの＞
現時点で未発表の研究成果については、学術集会および学会誌での成果発表を予定している。

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

14　その他の研究成果等

該当なし

15 「選定時」及び「中間評価時」に付された留意事項及び対応

該当なし

（様式2）

法人番号	211007
プロジェクト番号	S1513006L

16

（千円）

年度・区分		支出額	内訳						
			法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他（　　）	備考
平成27年度	施設	0	0	0					
	装置	9,990	3,330	6,660					
	設備	0	0	0					
	研究費	1,179	688	491					
平成28年度	施設	0	0	0					
	装置	0	0	0					
	設備	0	0	0					
	研究費	1,628	1,184	444					
平成29年度	施設	0	0	0					
	装置	0	0	0					
	設備	0	0	0					
	研究費	2,166	1,529	637					
総額	施設	0	0	0	0	0	0	0	
	装置	9,990	3,330	6,660	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	0	
	研究費	4,973	3,401	1,572	0	0	0	0	
総計		14,963	6,731	8,232	0	0	0	0	

（様式2）

法人番号	211007

17

《施　設》（私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。）　（千円）

施設の名称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
中部学院大学　5号館　運動実習準備室	平成19年度	50㎡	1		0	0	—

※　私学助成による補助事業として行った新増築により、整備前と比較して増加した面積

0　㎡

《装置・設備》（私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。）　（千円）

装置・設備の名称	整備年度	型　番	台　数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
（研究装置）				h			
				h			
				h			
				h			
				h			
（研究設備）							
研究用ポータブル光脳機能イメージング装置	平成27年度	LIGHTNIRS本体パック,認知機能1UNIT用プローブ	1	536 h	9,990	6,660	私学助成
				h			
				h			
				h			
				h			
（情報処理関係設備）							
				h			
				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況　（千円）

年　度	平成　27　年度			
小科目	支出額	積算内訳		
		主な使途	金額	主な内容
教育研究経費支出				
消耗品費	613	機器・部品・研究用消耗品	613	生活習慣記録機、健康調査データ取得、データ処理用
光熱水費	0			
通信運搬費	168	アンケート郵送代	168	アンケート送付用
印刷製本費	217	封筒・アンケート印刷費	217	アンケート本体およびアンケート返信用封筒の印刷
旅費交通費	0			
報酬・委託料	127	アンケート配布	127	封緘、ポスティング作業
（　　）				
計	1,125			
アルバイト関係支出				
人件費支出	54	アンケート集計	54	時給　760円，年間時間数　72時間，1名
（兼務職員）	0			
教育研究経費支出	0			
計	54			
設備関係支出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	0			
図　書	0			
計	0			
研究スタッフ関係支出				
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			

（様式2）

法人番号	211007

年　度	平成　28　年度			
小科目	支出額	積算内訳		
		主な使途	金額	主な内容
教育研究経費支出				
消耗品費	635	機器・部品・研究用消耗品	635	生活習慣記録機、健康調査データ取得、データ処理用
光熱水費	0			
通信運搬費	18	アンケート郵送料、文献複写	18	アンケート送付用
印刷製本費	0			
旅費交通費	0			
報酬・委託料	11	損害保険料	11	測定会開催の際の保険料
（賃借料）	12	会場賃借料	12	測定会開催の際の会場借上費
（会議費）	17	弁当代	17	測定会開催の際の昼食代
（　　）				
計	693			
アルバイト関係支出				
人件費支出（兼務職員）	106	測定会補助、データ入力	106	時給　800円，年間時間数　136．5時間
教育研究経費支出				
計	106			
設備関係支出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	810	研究用機器備品	810	光イメージング装置LABNIRS付属品
図書	19	認知症関連図書	19	精神疾患の診断・統計マニュアル
計	829			
研究スタッフ関係支出				
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			

年　度	平成　29　年度			
小科目	支出額	積算内訳		
		主な使途	金額	主な内容
教育研究経費支出				
消耗品費	753	機器・部品・研究用消耗品	753	生活習慣記録機、健康調査データ取得、データ処理用
光熱水費	0			
通信運搬費	13	郵送料、送料	13	アンケート送付
印刷製本費	0			
旅費交通費	31	交通費	31	測定会のための交通費
報酬・委託料	5		5	保険料
（賃借料）	25	会場賃借料	25	測定会開催の際の会場賃借料
（会議費）	28	弁当代	28	測定会開催の際の昼食代
計	855			
アルバイト関係支出				
人件費支出（兼務職員）	131	測定会補助、データ入力	10	時給　780円，年間時間数　14時間
		測定会補助、データ入力	121	時給　800円，年間時間数　151時間
教育研究経費支出				
計	131			
設備関係支出（1個又は1組の価格が500万円未満のもの）				
教育研究用機器備品	1,179	研究用機器備品	679	研究用レーザー血流計RBF-101
図書	1	図書購入	1	介護危機「数字」と「現場」の処方箋
計	1,180			
研究スタッフ関係支出				
リサーチ・アシスタント	0			
ポスト・ドクター	0			
研究支援推進経費	0			
計	0			